

翻刻 大阪府立大学図書館蔵『平家物語』（一）

著者	奥村 和子
引用	百舌鳥国文. 2021, 30, P.277-286
URL	http://doi.org/10.24729/00017440

〈翻刻〉大阪府立大学図書館蔵『平家物語』(一)

奥村和子

一 翻刻

大阪府立大学総合図書館中百舌鳥所蔵の平曲譜本『平家物語』は、波多野流の譜本と考えられているが、その詳細は明らかにされていない。翻刻及び、譜記の整理、他の波多野流譜本との比較等を行なうことによつて、その譜本としての性質に言及したい。¹⁾

なお翻刻にあつて、振り仮名、句読点、濁点の有無および改行は原文のままとし、旧漢字・異体字、繰り返し記号はおおむね現行書体に改めた。虫食い等で読めない箇所は「」としてゐる。また曲節は□で囲み、発音注記は()でくくつた。

紙面の都合上、本稿では巻一のうち「殿上闇討」「鱸」「禿童」「我身栄花」までの翻刻を行い、以下は次号以降に順次掲載することとしたい。また、譜記については本稿では触れず、稿を改めて整理を行い、アクセントとの関連についての考察を

行う予定である。

殿上闇討

鱸

禿童

我身栄花

妓王

二代后

平家物語巻第一

殿上闇討

クトキ

シカケリイマダビゼンロミトキ
ハ然るを忠盛未備前守たりし時

トクノ
鳥羽院の御願得長寿院を遣進

サンジラサンゲン
ミドウ
して。三十三間の御堂をたて

イセセハイツクイワラホトケスヘタケツ
一千一体の御仏を居奉らる。供養は

天承元年三月十三日也。勳賞には欠国を給ふべき由。仰下されける折節。但馬国のあきたりけるをぞ下されける。上皇猶御感の余りに。内の昇殿をゆるさる。忠盛三十六にて始めて昇殿す。雲の上人。

是を猜み憤り。同じき年の十一月廿三日。五節(ツメ)豊の明の節会の夜。

忠盛をコハリサゲ 闇討にせんとぞ。儀せられける。折音 忠盛此由を。伝聞て。我。右弼。

の身にあらず。武勇の家に生れて。今不慮の恥にあはん事。家のため。

身のため。心憂かるべし。サシ 詮ずる所。身を全して。君に仕奉れといふ。本文有とて。兼て用意をいたす。

クトギ 参内の始より。大きな鞆巻を。用意し。束帯の下にしどけなげに差ほらし。火のほの闇き方に。

向つて。やはら此刀を抜出ひて。鬘に引当られたりけるが。余所よりは。

コハリサゲ 氷なんどの。コハリサゲやうにそ見えたりける。諸人目を。すましけり。白音 又忠盛の郎等もとは一門たりし。木工助平。

貞光が孫。新の三郎大夫家房が。

子に。左兵衛尉家貞といふものあり。薄青の狩衣の下に。萌黄にほひの腹巻を着。弦袋つけたる太刀脇。

挟んで。殿上の小庭に。畏てぞ。ハツミ 候ひける。コハリサゲ 貫首以下奇をなして。クトキ へうつほ。

柱よりうち。鈴の綱の辺に。布衣の。

ものの候は。何ぞぞ狼藉なり。とうとう罷出よと。六位をもつて。コハリサゲ いわせ。

甲音 相伝の主。備前守殿の。今夜闇討に。せられ給ふべき由。承て。其ならん様を見んとて。かくて候なり。クドキ へえこそ出。

ましとて。又畏てぞ候ける **初重** 是等を。よし
なしとや。思われけん。其夜の闇討。なか

りけり **サシ** 忠盛又御前のめしにまはれ
けるに人々拍子を揃へて。伊勢瓶子は

醜甕なりけりとそ。はやされける

中音 へかけまくも忝く。此人々は。柏原の

天皇の。御末とは。申ながら。中比は。都

の住居も。うとうとしく。地下にのみ

。振舞なつて。伊勢の国に住国。ふかか

りければ。其国の。器に。ことよせ。て

。伊勢平氏とそ。はやされける **初重** へ其上

。忠盛の目の。眇たりける。故にこそ

。加様には。はや。されけるなれ **クトキ** 忠盛何と

すべきやうもなくして。御遊も未

終らざるさきに。密に御前を罷出

られけるが。紫震殿の御後にして

。人々の見られける所に。横たへさせ

たりける腰の刀を。主殿司に。 **コハリサゲ** 預置

てぞ出られける。家貞待請。奉て **甲音** へ扱

いかが候ひけるやらんと申ければ。角

とも言まほしうは。思はれければ共 **クトキ** へ正しういひつる程ならば。殿上までも

斬上らんずる。 **コハリサゲ** づら魂にてあるあいだ

。別の事なしとそ。答へられける **中音** へ五節 (ツメ)

には白薄様。こげんじのかみ。巻あ

けの筆。巴かいたる。筆の管など

。かやうにさまざま。面白き事をのみ

こそ。うたひまわるるに中比太宰

の。権の帥季仲の卿と。いふ人あり

けり。余りに色の。黒かりければ。見る

人。黒帥とぞ。申ける **初重** へ此人未藏人の

頭たりし時。御前の召に。まはれけるに

。人々拍子を揃へて。あなくるくろ。黒

き頭哉。いかなる人の漆ぬりけん

とぞ。はやされける **クトキ** 又花山院の前の

太政大臣忠雅公。いまだ十歳なりし

時。父中納言忠宗の卿にをくれ給ひて。孤子にておはせしを。故中の御門の藤中納言家成の卿其時はいまた。播磨の守にておはせしが。聳に取てはなやかにもてなされしかば。是も五節には。播磨よねは

とくさかむくの葉か。人のきらを磨はとぞはやされける。上古にはかやうの事共多かりけれ共事出こず。いなかあらんずらん。覚束なしとぞ

コハリサゲ

末代

。人々ささやき。あはれける。五節(ツメ)果にしかば。院中の公卿殿

白音

案のごとく

上人。一同に訴申されけるは。夫雄劍を帯して公宴に列し。兵杖を給はつて。宮中に入出入するは。皆是格式の礼を守る。綿命由ある先規也。然るを忠盛。或は年来の郎等と号して。布衣の兵を殿上の小庭に召置。或は

腰の刀を横だへさいて。節会の座に列る。両条希代。いまた聞ざる狼藉なり。事既に重畳せり。罪科尤。ハツミ のがれがたし。クトキ 削て。欠官停任おこなはるべきかと。諸卿一同に訴申されたりければ。上皇

大きに驚かせ給ひて。忠盛を御前へ召て。サケ 御尋あり。陳じ申されけるは。折音 郎従小庭に祇候の由。全く覚悟。仕らず。但し近日(ツメ)人々。あひたく

折音

先

まるる旨。子細あるかの間。年来の家。事を伝聞かによつて。其恥を助

けんがために。忠盛にはしらせずして。密に参候の条。力及ばざる。次第也。答有べくは。かの身をメシ進すべきか。次に刀の事は。主殿司に預置候ひ畢。召出ひて刀の実否によつて。答のさう行るべきかと。憚る所もなう

クトキ

若

申されたりければ。此義尤然るへし
とて。急ぎ彼刀を召出ひて觀覽

あるに。【サケ】上は鞘卷の黒う 【サケ】塗たりけるが

中は木刀に。銀箔をぞ押たりける

【中音】へ当座の恥辱を。のがれんがために。刀を
帶する由。頭すといへども。後日の

訴訟を。存して。木刀を帶しける

。用意の程こそ。神妙なれ。弓箭に

。携さはらんずる者の謀には。尤角

こそ。あらまほしけれ。兼ては又郎

従小庭に伺候の事。且は武士の郎

等の習なり。全く是は。忠盛が科には

あらずとて却て。歡感に。預かつし

上は。敢て罪科の。沙汰はなかりけり

鱸

【クトキ】へ其子供は皆諸衛の佐になる。昇殿

せしに。殿上のまじはり人をきらふ

に及ばず。或時忠盛。備前の国より

のぼられけるに。鳥羽院明石の浦は

いかにと。【サケ】仰ければ。忠盛。かしこまつて

【歌】有明の。月もあかしの。浦風に

。なみばかりこそ。よると見えしか

と 【サシ】申されたりければ。院斜ならず

御感有て。頓て此歌をは。金葉集

にぞ。入られける 【クトキ】へ忠盛また仙洞に。最

愛の女房を持て通はれけるが。或夜

おはしたるに。彼女房のつぼねに。妻に

月出したりける扇を。とり忘れて出

られたれば。かたへの女房達。是はいづ

くよりの月影ぞや。出所覚束なし

なんと。【サケ】笑ひあはれければ。彼女房

【ウタ】へ雲井よりただもりきたる。月なれば

。おぼろけにては。いはじとぞおもふ

と 【初重】へ説たりければ。いとと浅からずそ。思

はれける。薩摩守。忠度の母これなり

。似るを友とかやの。風情にて。忠盛の

。すいたり。ければ。彼女房も。優なり

けり **白音** へ角て忠盛刑部卿になつて。仁平

三年正月十五日。歳五十八にてうせ

給ひしかば。清盛嫡男たるによつて

其跡をつぐ。保元元年七月に

。宇治の左府代を乱り給ひし時

。味方にて先をかけたければ勳賞

行なはれき。元は安芸の守たりしが

播磨の守に遷て。同じき三年太

宰の **ハツミ** 大式になる **クトキ**

。信頼義朝が謀反の時も。御方にて

賊徒を討平けたりしかば。

コハリサゲ 勲功一に

あらず。恩賞は重かるべしとて

ヒロイ へ次の年。正三位に叙せられ。打つつき

。宰相衛府の督。檢非違使の別当

。中納言大納言に経上つて。剩へ。丞相

の。位に至り。左右を経ずして内大

臣より。太政大臣従一位に至る。大将には

あらね共。兵杖を給はつて。隨身を

。召具す。牛車贊車の官旨を蒙

つて。乗ながら。宮中に。出入すひとへに

。執政の。臣のごとし **三重甲** 太政大臣は。一人に

。師範として。四海に。儀刑せり。国を

。治め。道を論し。陰陽を。やはらげ。お

さむ **クタリ** へ其人に。あらずは。則かけよと

いへり。されば。則欠の官とも。名付られ

たり。其人ならては。けがすまじき

。官なれども。此入道相国は。一天四海を

。掌の中に。握り給ふ。上は。子細に。及

ばず **クトキ** へ抑平家。かやうに繁昌せられ

ける事をいかにといふに。偏に熊野の

権現の。御利生とぞ聞えし。其故は

清盛公いまだ安芸守たりし時

。伊勢の国阿野の津より。舟にて

熊野へ参られけるに。大きな鱸の

サケ 舟へ踊り入たりければ。先達。申

けるは **折音** 昔周の武王の舟にこそ。白
魚は。踊り入たんなれ。いかさまにも
是は。権現の御利生と覚候。まいる
べしと。申ければ **サシ** へさしも十戒を
たもつて。精進潔斎の道なれども
調味して我身くひ。家の子郎

等どもにも。くはせらる **初重** へ其故にや
吉事のみ打つづひて。我身太政
大臣に至り。子孫の官も。龍の雲に
のぼるよりも。猶速なり。九代の
先蹤を。越給ふこそ。めでたけれ
禿童

クトキ 角て清盛公。仁安三年十一月十一日
。年五十一にて病に侵され存命の
為にとて。即 出家入道す。法名をば
浄海とこそつき給へ。其故にや宿
病たちところにいへて。天命を全す
。出家の後も英雄は猶つきずとそ

見えし。自人の随ひつき奉る事は
。吹風の草木をなびかすがごとく
。世の普くあふげる事も。降雨の
国土を湿すに同じ。六波羅殿の
御一家の君達とだにいへば。花族
も英雄も。誰肩を双べ。面を向ふ

者なし。入道相国のこじうと。平
大納言時忠の卿の宣ひけるは。此一門
にあらざらんものは。皆人非人たるべし
とぞ宣ひける。かかりしかば我も
人も。此一門にむすほれんとそし
ける。烏帽子のためやうよりはじめて

。衣文のかきやうに至る迄。 **サケ** 何事も
六波羅様とだにいひてんじかば
。一天四海の人。皆是をまなぶ **折音** へいか
なる賢王賢主の御政。撰政関白
の。御成敗をも。世に余されたる程の
徒ものなんどの。かたはらに寄合て

何となふそしり傾け申事は
常のならひなれども。此禪門世ざかり

クトキ

へ又

の程は。聊ゆるかせに。申者なし
入道相国の謀に。十四五六の童を
三百人すくつて。髪をかふるに切
廻し。あかき直垂をきせて召仕れ

けるが。京中にみちみちて往反し
けり。自平家の御事。あしざまに申
者あれば。一人聞いださぬ程こそ
有けれ。余覚にふれ廻らし。彼家
に乱入し。資財雑具を追捕し
其奴を擲取て。六波羅へゐて参る

凡目に見心にしるといへども。詞に
あらはして申者なし。六波羅殿の
禿とだにいへば。道を過る馬車も
皆よきてぞ通しける。禁門を出
入すといへとも。初重へ姓名を。尋らるるに
及ばず。京師の長吏。是かために。目

を側むと。見えたり

我身栄花

中音

へ我身の栄花を。極るのみならず。一

門共に。繁鳥して。嫡子重盛内
大臣の。左大将。次男宗盛。中納言
の。右大将。三男知盛。三位の。中将。嫡

孫維盛。四位の少将。すべて。一門の
公卿。十六人。殿上人。三十余人。諸
国の受領。衛府諸司。都合六十余
人なり。世には又。人なくぞ。見られ
ける。クトキへ昔奈良の御門の御時。神龜五
年朝家に。中衛の大将を始めを

大同四年に。中衛を近衛とあらため
られしより以来。サケ兄弟左右に相双ぶ
事。纒に。三四ケ度なり。三重甲。文徳。天皇の
御時は。左に。良房。右大臣の。左大将。右に
。良相。大納言の。右大将。是は閑院の。左
大臣。冬嗣の。御子なり。クタリへ朱雀院の。御宇

には。左に実頼。小野ノ宮殿。右に師輔

。九条。殿。貞仁公の。御子なり **初重** 後冷泉院の

。御時は。左に教通。大二條殿。右に頼宗。堀

川殿。御堂の。関白の。御子なり **初中** 二条の院の

。御宇には。左に。基房。松殿。右に兼実

。月の輪。殿。法性寺殿の。御子なり **初重** 是

みな。摂祿の。臣の。御子息。凡人に取ては

。其。例なし。殿上の。まじはりをだに

。嫌はれし人の。子孫にて。禁色雑

袍をゆり。綾羅錦繡を。身にまとひ

。大臣の大将に成て。兄弟。左右に。相

並ぶる。末代と。はいひながら。不思議

成し。事共なり **クトキ** 其外御女人おは

しき。皆とりどりに幸給へり。一人は

桜町の中納言重教卿の。北の方にて

おはすべかりしを。八歳のとし御約束

斗にて。平治の乱れ以後引ちがへ

られて花山院の左大臣殿の。御台盤

所にならせ給ひて。君達あまたまし

ましけり。抑此重教の卿を。桜町の中

納言と申ける事は。勝れて心数寄

給へる人にて。常は芳野の山を恋つつ

。町に桜を植並べ。其内に屋を建て

住給ひしかば。 **サケ** 来る年の春毎に。見る

人。桜町とぞ。申ける **中音** 桜は咲て七ヶ日に

散を。名残を惜み。天照太神に。祈申

されければにや。三七日迄。名残ありけり

。君も賢王にて。ましませば。神も。神

徳を。耀し。花も。心ありければ。廿日の

。齢を保けり **初重** 一人は。后に立せ給ふ

。皇子御誕生有て。皇太子にたち

。位につかせ。給ひしかば。院号蒙ら

せ。給ひて。建礼。門院とぞ。申ける。入道

相国の。御娘なる上。天下の国母にて

。まし。ませば。兎角申に。及はれず

は六条の摂政殿の。北の政所にならせ **白音** 一人

給ふ。是は高倉院御在位の御時。御
 母代とて。准三后の宣旨を蒙らせ
 給ひて。白河殿とおもき人にて
 ぞましましける。一人は普賢寺殿の北
 の政所。一人は冷泉の大納言。陰房の卿
 の北の方。一人は七(ツメ)条の修理の大夫。信

ハツミ

相具し給へり

クトキ

又安芸の国

隆の卿に。
 敵島の内侍が腹に一人。是は後白
 河の法皇へ参らつさせ給ひて。偏に
 女御のやうでぞましましける。其外
 九条の院の雑仕常盤が腹に一人
 。是は花山院殿の。
 サケ 上臈女房にて。臈の

御方とぞ。申ける 三重甲 日本秋津島は。纒に
 。六十六ヶ国。平家知行の国。三十余ヶ
 国。既に半国に。越たり。其外。庄
 園。田島。いくらといふ。敷を。しらす
 充満して。堂上。花農。とし。軒騎
 群集して。門前。市を。なす。楊州の

クタリ

綺羅

金。荊州の珠。呉郡の綾。蜀江の錦
 。七珍万宝。一つと。して。かけたる。事
 なし 初重 歌堂舞閣の。もとひ。魚龍爵馬
 の玩物。恐らくは。帝欠も。仙洞も。是
 には過しとぞ見えし

(注)

- (1) 大阪府立大学図書館蔵『平家物語』の書誌及び解題については、鈴木孝庸氏『平曲伝承資料の基礎的研究』(科学研究費補助金研究成果報告書、平成4年度)、拙稿『大阪府立大学図書館蔵『平家物語』について』(『言語文化科学研究 日本語日本文学編』10号、平成27年3月)等参照。
- (2) 「太宰」のルビ「ダサイノ」の「サ」に「一」(清音注記)。
- (3) 「しか」の「か」に「一」(清音注記)。
- (4) この行の冒頭に「世を譲りトモ」の注記あり。
- (5) 「道」のルビは「ミチ」と書いた上から「ドウ」と書いた形跡がある。
- (6) 「花族」のルビ「タハソク」の「ソ」に「一」(清音注記)。
- (7) 「堂上」のルビ「タウシヤウ」の最初の「ウ」の横に「ヲ」。
- (8) 「荊州」のルビ「ケイシウ」の「シ」に「一」(清音注記)。
- (9) 「歌堂」のルビ「カタウ」の「タ」に「一」(清音注記)。

(おくむら かずこ・本学准教授)